

現代ホラー小説を
知るための100冊

朝宮運河

日本の現代ホラー 小説入門

の待望の
ブックガイドが
ついに登場!

貞子を生んだ傑作『リング』から現在に至る
現代ホラー小説の歴史を辿るための**100冊**をご紹介します!

現代ホラー小説を知るための100冊

朝宮運河

星海社

348



SEIKAISHA
SHINSHO

近年、日本のホラー小説がなんだか盛り上がっている。そう感じている方も多いのではないだろうか。

たとえば二〇二四年には、背筋せすじの小説『近畿地方のある場所について』きんぎの大ヒットをきっかけに、空前のモキュメンタリーホラーブームが起こり、背筋せすじや梨なし、雨穴うけつといった新世代作家がネット記事や新聞、雑誌、テレビでたびたび取り上げられた。

その数年前から、ホラー小説シーン全体も活況ていを呈している。このジャンルに早くから取り組んできたベテラン・中堅ちゅうけん作家が力のこもった作品を発表する一方、横溝よこみぞ正史せいしミス터리&ホラー大賞をはじめとする新人賞や、カクヨムなどの小説投稿サイトから个性的な才能が相次いでデビュー。大型書店には読み切れないほどのホラーが並んでいる。

ミステリやSFなど他ジャンルで活躍してきた人気作家が、ホラーに参戦するなど話題

に事欠かない。第一六九回（二〇二三年上半期）の直木賞候補作に、沖方丁『骨灰』と高野和明『踏切の幽霊』とホラーが二冊も含まれていたのは象徴的である。二〇二四年にはこうした状況を受けて、ホラー小説のランキング本『このホラーがすごい！2024年版』も刊行されている。出版界にホラーブームが到来したとみて、まず間違いはないだろう。

ホラーを専門とする書評家・ライターである私のもとにも、昨年からホラーブームに関する取材や寄稿の依頼がしばしば来るようになった。その際によく投げかけられるのが、「なぜ今ホラーが流行っているのか」「日本のホラーはどのように発展してきたのか」という質問である。

こうした質問に答えながら、近年のホラーブームをきっかけにこのジャンルに関心を抱いた人々の指針となるような、新たなホラー入門書の必要性を痛感していた。これまでもホラーのガイドブックは複数刊行されているが、現在のホラーブームまでを射程に収めた本は存在しない。万能に思えるネット検索も、このジャンルに関してはそれほど役に立たないようだ。

背筋や梨、あるいは澤村伊智や芦花公園の作品によってホラーの面白さを知った読者が、

好みに合った作品を探すことができ、現代ホラー小説の流れを大まかにたどることができ
るようなガイドブック。本書『現代ホラー小説を知るための100冊』はそのような本を
目指して書かれている。

ところでホラー小説とは何だろうか。端的たんできに述べるなら「怖い小説」のことだが、それ
だけでは言葉が不十分なので、もう少し説明しておこう。ホラー小説の核心かくしんにあるのは、
「現実には起こりえない事柄ことばら」が引き起こす恐怖きょうふである。現実には起こりえない事柄、つ
まり幽霊や怪物に代表される超自然現象である。怖いといえば病気や事故、犯罪や自然災
害おそも恐ろしいものだが、それらは私たちが生きている現実の延長線上にあるもので、ホラ
ー小説の領域からはやや外れるのだ。本書ではこの立場から「ホラー小説とは怪異と恐怖
の文学である」と定義しておくことにしよう。

本書のタイトルにある「現代ホラー」とは、具体的には一九九一年から二〇二四年まで
に日本国内で発表されたホラー小説を指している。本文でもあらためて述べることになる
が、わが国においてホラー小説がミステリやSFと並ぶエンターテインメントのジャンル

として一応の自立を見たのは、一九九〇年代初頭のことだった。この時期、現代ホラーの象徴的作品である鈴木光司すずき こうじの『リング』が刊行され、ホラーに特化した新人賞である日本ホラー小説大賞がが創設、ホラーの語を冠かんした初の文庫レーベルである角川ホラー文庫が創刊されるなど、ホラー史上重要な出来事が相次いで起こっている。

この時代出版界を覆おおったホラー小説の高波は、その後も大きくなったり小さくなったりをくり返ししながら、令和のホラーブームまで途絶えることなく続いている。つまり現在のホラー小説をめぐる状況は、一九九〇年代初頭の延長線上にあるともいえるのだ。

もちろん一九八〇年代以前にも、先駆せんく的な作家によってホラー小説は書かれてきた。ときに伝奇バイオレンス、ときに怪奇ミステリなどと呼ばれたそれらの作品は、現代ホラーの源流として見逃せないものだが、本書では現役作家への直接的影響がより大きいと思われる、一九九〇年代以降の作品を取り上げることにした。

100冊を紹介するにあたっては、一九九一年から二〇二四年までを八章に分け、それぞれの時代において重要と思われる作品を刊行順に並べている。なるべく偏かたよりのない目で100冊を選んだつもりだが、単著という性質上、私のホラー観や好みを反映したものに

なるのは避けられない。現代ホラーのオールタイムベストというより、100冊からなるアンソロジーと想っていた方がいいかもしれない。

各紹介ページには簡単な「あらすじ」と「ガイド」に加え、「併読のスズメ」と題したコラムを設けているが、ここでは一九八〇年代以前の作品や海外作品にも、積極的に言及している。内外の古典作品を知っておくと、現代ホラーがいつそう面白くなるはずなので、興味をそそられた作品はぜひ手を伸ばしてみていただきたい。残念なことにすでに新刊書店での入手が難しくなっている本も多いが、電子書籍や図書館、古書店などを活用すれば、大抵の作品は読むことができるはずだ。そして読んでみて面白かった本は、どんどん感想を発信してほしい。あなたの声が、埋もれた名作の復刊に繋がるかもしれない。

各章の末尾には、現代ホラーの系譜をたどった論考「現代ホラーの新しい波」と、「現代ホラー年表」を付した。あわせて読んでいただくと、ホラーの流れがより理解しやすくなると思う。

二〇二五年現在、日本のホラー小説は極めて刺激的な状況にある。これまでホラーを読んでこなかったという方も、本書をきっかけに現在進行形のホラーブームの目撃者となっ

ていただければ幸いだ。

ホラー小説は面白い。一人でも多くの方にそう思ってもらおうのが、本書の目的である。

はじめに……………3

第1章 現代ホラー勃興

no. 01	鈴木光司『リング』……………16	no. 07	中島らも『ガダラの豚』……………28
no. 02	高橋克彦『緋い記憶』……………18	no. 08	森真沙子『転校生』……………30
no. 03	新井素子『おしまいの日』……………20	no. 09	梅原克文『二重螺旋の悪魔』……………32
no. 04	恩田陸『六番目の小夜子』……………22	no. 10	篠田節子『神鳥——イビス』……………34
no. 05	宮部みゆき『とり残されて』……………24	no. 11	竹本健治『閉じ箱』……………36
no. 06	坂東真砂子『死国』……………26	no. 12	井上雅彦『異形博覧会』……………38

第2章 ベストセラーホラーの時代……………40

no. 13	瀬名秀明『パラサイト・イヴ』……………42	no. 16	小池真理子『水無月の墓』……………48
no. 14	綾辻行人『眼球綺譚』……………44	no. 17	小林泰二『玩具修理者』……………50
no. 15	赤川次郎『怪談人恋坂』……………46	no. 18	梶尾真治『OKAGE』……………52

no. 19	貴志祐介『黒い家』……………	54
no. 20	中井拓志『レフトハンド』……………	56
no. 21	大槻ケンヂ『ステーション』 （『ステーションズ少女再殺全談』）……………	58

第3章 世紀末ホラー黄金時代

no. 22	津原泰水『妖都』……………	60
no. 23	皆川博子『ゆめこ縮緬』……………	62
no. 24	貴志祐介『天使の囁り』……………	64
no. 25	小野不由美『屍鬼』……………	66

no. 26	今邑彩『よもつひらさか』……………	70
no. 27	牧野修『偏執の芳香アロマパラボノイド』 （『アロマパラボノイド 偏執の芳香』）……………	72
no. 28	朝松健『邪神帝国』……………	74
no. 29	岩井志麻子『ぼっけえ、きょうてえ』……………	76
no. 30	若竹七海『遺品』……………	78
no. 31	倉阪鬼一郎『ブラッド』……………	80

no. 32	雨宮町子『たたり』……………	82
no. 33	伊島りすと『ジュリエット』……………	84
no. 34	甲田学人『Missing 神隠しの物語』……………	86
no. 35	乙一『暗黒童話』……………	88
no. 36	菊地秀行『幽剣抄』……………	90
no. 37	田中啓文『ベルゼブブ』（『蠅の王』）……………	92

第4章 多様化の時代

no. 38	五十嵐貴久『リカ』……………	96
no. 39	平谷美樹『呪海 聖天神社怪異縁起』……………	98

no. 40	福澤徹三『廃屋の幽霊』……………	100
no. 41	加門七海『203号室』……………	102

no. 42	森山東『お見世出し』……………	104
no. 43	朱川湊人『花まんま』……………	106
no. 44	飛鳥部勝則『鏡陥穽』……………	108
no. 45	遠藤徹『弁頭屋』……………	110
	（『壊れた少女を拾ったので』）……………	110
no. 46	恒川光太郎『夜市』……………	112
<hr/>		
no. 47	稻生平太郎『アムネジア』……………	114
no. 48	三津田信三『厭魅 <small>まじもの</small> の如き憑くもの』……………	116
no. 49	平山夢明『独白する ユニバーサル横メルカトル』……………	118
no. 50	森見登美彦『きつねのはなし』……………	120
<hr/>		
no. 51	黒史郎『夜は一緒に散歩しよう』……………	124
no. 52	山白朝子『死者のための音楽』……………	126
no. 53	京極夏彦『幽談』……………	128
no. 54	宮部みゆき『おそろし三島屋変調 百物語事始』……………	130
no. 55	田辺青蛙『生き屏風』……………	132
no. 56	北上秋彦『死霊列車』……………	134

第5章 怪談文芸ムーブメント……………122

no. 57	有栖川有栖『赤い月、廃駅の上に』……………	136
no. 58	宇佐美まこと『入らずの森』……………	138
no. 59	高原英理『抒情的恐怖群』……………	140
no. 60	沼田まほかる『アミダサマ』……………	142
no. 61	飴村行『粘膜蜥蜴』……………	144
no. 62	綾辻行人『Another』……………	146

第6章

混沌カオスの二〇年代前半

no. 63	法条遥『バイロケーション』	150
no. 64	朱雀門出『首ざぶとん』	152
no. 65	堀井拓馬『なまづま』	154
no. 66	小島水青『鳥のうた、魚のうた』	156
no. 67	小野不由美『残穢』	158
no. 68	榎木理宇『ホーンテッド・キャンパス』	160
no. 69	三津田信二『のぞきめ』	162

no. 70	花房観音『恋地獄』（京都恋地獄）	164
no. 71	矢部嵩『魔女の子供はやってこない』	166
no. 72	浅田次郎『神坐す山の物語』	168
no. 73	雪富千晶紀『死呪の島』	170
no. 74	舞城王太郎『淵の王』	172

第7章

現代ホラーの新しい波

no. 75	澤村伊智『ぼぎわんが、来る』	176
no. 76	名梁和泉『二階の王』	178
no. 77	最東対地『夜葬』	180
no. 78	内藤了『鬼の蔵よろず建物因縁帳』	182
no. 79	篠たまき『やみ窓』	184
no. 80	宮澤伊織『裏世界ピクニック』	194

no. 81	ふたりの怪異探検ファイル	186
no. 82	山吹静叶『迷い家』	188
no. 83	芦沢央『火のないところに煙は』	190
no. 84	井上宮『ぞぞのむこ』	192
	岩城裕明『呪いに首はありますか』	194
	（『呪いのカルテたそがれ心霊クリニック』）	194

no. 85	織守きょうや『響野怪談』	196
no. 86	朱野帰子『くらやみガールズトーク』	198

第8章 令和のホラーブーム

no. 88	原浩『火喰鳥を、喰う』	204
no. 89	阿泉来堂『ナキメサマ』	206
no. 90	芦花公園『異端の祝祭』	208
no. 91	新名智『虚魚』	210
no. 92	辻村深月『闇祓』	212
no. 93	冲方丁『骨灰』	214
no. 94	梨『6』	216

no. 87	滝川さり『お瞬り』	200
--------	-----------	-----

no. 95	小田雅久仁『禍』	218
no. 96	大島清昭『最恐の幽霊屋敷』	220
no. 97	背筋『近畿地方のある場所について』	222
no. 98	斜線堂有紀『本の背骨が最後に残る』	224
no. 99	北沢陶『をんごく』	226
no. 100	上條一輝『深淵のテレパス』	228

評論	現代ホラーの新しい波	230
おわりに		246
現代ホラー年表		250

現代ホラー 勃興

一九九〇年代初頭は日本ホラー小説史の転換点だった。一九九三年にホラーを対象とした大型の新人賞・日本ホラー小説大賞が鳴り物入りで創設され、それに連動してホラー専門の文庫レーベル・角川ホラー文庫が角川書店より創刊される。平成初期、それまで一部のマニアが好むものであったホラー小説は、新時代のエンターテインメントとして広く注目を集めたのである。そしてこの時期、現代ホラー史において極めて重要な作品が刊行されている。鈴木光司すずき こうじの『リング』だ。映画化され、ホラーブームを引き起こし、後続作家に絶大な影響を与えたこの作品から、現代ホラーの歩みは始まる。

鈴木光司

『リング』

歴史を変えた、感染系ホラーの金字塔

あらすじ 東京と神奈川で十代の男女四人が同日同時刻に急死した。その事実を偶然知った記者の浅川は、四人が死の一週間前、箱根の貸し別荘に宿泊していたことを突き止める。現地に向かった彼は、タイトルのない一本のビデオテープを発見。そこには脈絡のない映像に続いて、「この映像を見た者は、一週間後に死ぬ運命にある」との不吉な言葉が。四人の命を奪った呪いに感染したことを悟った浅川は、旧友の大学講師・高山とともにビデオの謎を解こうとする。しかし死のタイムリミットは刻一刻と迫っていた……。



1991年6月、角川書店刊行。
書影は角川ホラー文庫版。

併読のススメ 「リング」シリーズほどメディアミックスに成功したホラー小説はないだろう。国内外で作られた多くの映画をはじめ、コミカライズ、舞台など関連作は数え切れない。
鈴木光司による原作小説は、呪いウイルスという

ガイド 第十回横溝正史賞の最終候補作を書籍化した『リング』が、角川書店より発売

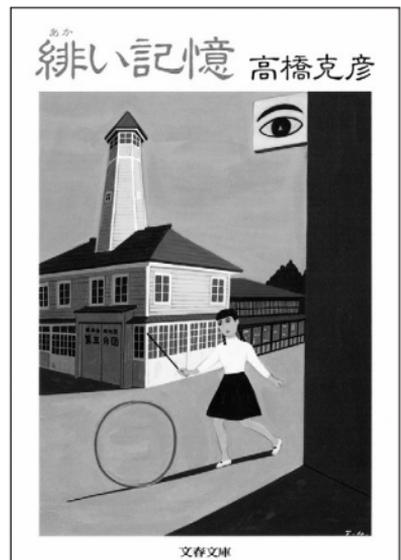
されたのは一九九一年六月のこと。カバーにビデオテープをあしらったこの本が、ホラーの歴史を大きく変えることになろうとは、作者の鈴木光司自身も予測していなかったに違いない。九三年の文庫化がきっかけで人気に火が点いた『リング』は、中田秀夫監督による映画化（九八年）が社会現象ともいえるブームを巻き起こし、普段ホラーを読まない層にも広く認知されることとなった。海外での知名度や後世に与えた影響の大きさからいっても、紛れもなく日本のホラー小説を代表する一冊である。

『リング』といえば白いワンピースに黒髪を垂らした怨霊・貞子が思い浮かぶが、あの印象的なビジュアルは映画化に際して生み出されたもの。原作ではエピソードを丁寧に積み重ね、悲劇の異能者としての存在感を際立たせている。呪いがまるでウィルスのように広がっていく『リング』のプロットは多くの追隨者を生み、いまやホラーのひとつの定型となっているが、浅川の姪が何かを目撃して絶命する冒険から強烈なサスペンスで読者を圧倒し、クライマックスの予想外の展開を経て、戦慄のラストシーンへとなだれ込んでいく本作の完成度は際立っている。現代ホラーの輝ける原点にしてひとつの最高到達点。VHSテープが過去のものとなっても、この恐怖だけは永遠だ。

『リング』の着想をさらに押し進めた続編『らせん』が一九九五年に刊行されてベストホラーに。前二作の内容を予想外の形で継承した『ループ』（九八年）でシリーズは一旦の完結を見た。三部作の外伝を収録した短編集『バースデイ』（九九年）も発売されている。二〇一〇年代に入るとしばしの沈黙を破ってセカンドシーズンが開幕。今日まで『エス』（二二年）と『タイト』（二三年）の二作が発表されている。貞子のキャラクターを前面に押し出した映画に対し、原作シリーズは呪いが蔓延する世界の謎を壮大なスケールで描く、ジャンル越境的なエンタメになっている。

高橋克彦
たか はし かつ ひこ『緋い記憶』
あか き おく記憶に隠された戦慄の光景
かく せんりつ

あらすじ 盛岡から上京してきた旧友・加藤が見せてくれた昭和三八年版の住宅地図。そこには私が高校時代を過ごした町の風景が、当時のまま保存されていた。しかし緋色の記憶が残るあの家はなぜか記されていない。同級生との再会を兼ねて盛岡に帰った私は、秘密を探るうち恐ろしい真相に突き当たる(表題作)。三十年ほど前、亡き母と泊まった温泉旅館の所在地を知った私は、岩手県やまわくの山奥に向かう。そこで一人の美しい女性と出会うが……(「ねじれた記憶」)。失われた七つの記憶を軸に、人生の謎と恐怖を描いた短編集。



1991年10月、文藝春秋刊行。
書影は文春文庫版。

併読のススメ 岩手県釜石生まれの高橋克彦は、東北の民話に材を取ったホラーを得意としている。彼にインスピレーションを与えたのが、柳田國男の名著『遠野物語』(一九〇年)。日本民俗学の原点である同書は天狗、河童、ザシキワラシなど

ガイド 高橋克彦といえは『写楽殺人事件』（一九八三年）などのミステリや『炎立つ』（九二〜九四年）などの歴史小説のイメージが強いかもしれないが、ホラーにも並々ならぬ思い入れを示し、折に触れて読者を唸らせる逸品を発表している。特に『悪魔のトリル』（八六年）、『星の塔』（八八年）など短編集はいずれも傑作揃い。前者の巻頭を飾った「眠らない少女」（八三年）はアンソロジー・ピースとしても知られている。

『緋い記憶』はこの「眠らない少女」同様、封印された記憶をテーマとした短編集。超自然の恐怖を扱ったホラーと、人間心理の怖さに肉薄するミステリとが混在しているが、それまで信じてきた世界ががらりと足下から崩れていくような絶望と、帰るべき場所に帰ってきたという安堵感がない交ぜになった読み味は、七編すべてに共通している。作者が十代を過ぎた昭和中期のノスタルジックな風景が、さまざまな固有名詞とともに再現されているのも読みどころ。子ども時代が遠くなった大人の読者には、いっそう切なく響く作品だろう。第一〇六回直木賞受賞という事実も、小説としての質の高さを証明している。

本作はシリーズ化されており、同テーマの『前世の記憶』（一九九六年）、『蒼い記憶』（二〇〇〇年）の二作が発表されている。「ドールズ」シリーズ（八七〜一三年）と並んで、高橋ホラーの代表作といえる。

にまつわる興味深い逸話を数多く含んでおり、泉鏡花や芥川龍之介などの文豪が愛読したことも知られる。現代ホラーのアイデア源のひとつでもあるので、ぜひ目を通しておきたい。二〇一三年には京極夏彦が同書の収録エピソードを再配列し、現代語で語り直した『遠野物語 re:mi』も刊行されている。

数ある『遠野物語』インスパイア系ホラーの中では、山吹静畔『迷い家』（一七年）がユニークな着想で存在感を放つ。太平洋戦争末期、山中の屋敷（『遠野物語』の逸話を思わせる）に足を踏み入れた少年の冒険を、民話的想像力を用いて描いた長編だ。

あら い もと こ
新井素子

『おしまいの日』

精神の深淵を覗きこむサイコサスペンス

あらすじ 坂田三津子は満ち足りた生活を送っている。恋愛結婚で結ばれた夫・忠春との仲は、結婚後七年経っても円満。世田谷区内に一戸建てを借りて住み、それぞれの実家との関係も良好だ。しかし忠春は仕事が忙しく、帰宅が深夜になることもしばしば。さみしいという思いを押し殺したまま、三津子は毎晩忠春の帰りを待ち続ける。心の慰めは気まぐれに家にやってくる猫だけ。幸せだったはずの暮らしは、三津子の心をじわじわと蝕み、壊していく。坂田家に「おしまいの日」が刻一刻と迫っていた……。



1992年5月、新潮社刊行。
書影は中公文庫、新装版。

併読のススメ 『おしまいの日』のホラー的な読みどころとして、三津子視点で描かれる幻覚シーンがあげられる。とりわけ不気味なのが、後半に登場するUFOと白い虫のビジョン。UFOが吐き出した虫に怯える三津子の姿には、鬼気迫る

ガイド 現代ホラー小説の発展を考えるうえで無視できないのは、“ホラーの帝王”と呼ばれる作家スティーヴン・キングの影響だ。幽霊屋敷、吸血鬼などが登場する古典的な怪奇小説を、現代アメリカ社会を反映したエンターテインメント巨編として再生させたキングの試みは、世界的なモダンホラーブームを巻き起こす。わが国でも一九九〇年頃から、複数の作家がキングに刺激を受けたホラー長編を次々に発表、ホラーブームの礎を築いていくのである。

『あたしの中の……』（一九七七年）などの作品でSF界に新風を吹き込んだ新井素子も、早くからキングファンを公言してきた一人。国産モダンホラー勃興期に書かれた『おしまいの日』は、主人公の精神が少しずつ壊れていき、とうとう取り返しのできない破局を迎える、という展開においてキングの代表作『シャイニング』（同年）と深く響き合っている。

この小説が恐ろしいのは、三津子が自分を幸福だと信じて疑わないことだ。そのくせ強烈な孤独を感じている彼女の心は歪められ、やがて幻聴や幻視を引き起こすようになる。新井素子の持ち味であるライトな口語体と、あちこち黒く塗りつぶされた三津子の日記（キング風の演出だ）が、恐怖を盛り上げるうえで一役買っている。暴力や殺人を一切描くことなく、日常の終焉を描ききったサイコサスペンスの名品。

ものがある。

アメリカの作家シャーロット・パーキンズ・ギルマンの「黄色い壁紙」（一八九二年、『淑やかな悪夢 英米女流怪談集』、創元推理文庫）も、同じように孤独な女性が異様な幻覚に苦しめられる物語だ。神経の不調によって郊外の屋敷でひとり、療養生活を送る主人公。窓が釘付けされた部屋の壁紙はくすんだ黄色で、けばけばしい模様がっている。やがて彼女は壁紙の模様が動いていること、その裏側に無数の女たちが潜んでいることに気づき……。フェミニズムの文脈で評価されている短編だが、ホラーの古典でもある。

おんだりく
恩田陸ろくばんめ
『六番目の小夜子』

奇妙なゲームが怪異を招く学園ホラー



1992年7月、新潮文庫刊行。
書影は新潮文庫、新装版。

あらすじ

とある地方都市の進学校。ここでは生徒たちの間で、ある奇妙なゲームが代々続けられていた。三年に一度、三年生の中から「サヨコ」と呼ばれる生徒が選ばれる。その生徒は自分が選ばれたことを隠しながら、一年間サヨコ役を務めなければならぬのだ。六番目のサヨコが生まれる年の始業式、三年生・花宮雅子のクラスに津村沙世子という転校生が関西からやってきた。成績優秀、スポーツ万能の沙世子の出現は、その年のゲームの行方にも影響を与えていく。謎めいた雰囲気をもつ沙世子とは、いったい何者なのか？

併読のススメ

恩田陸の第二作『球形の季節』（一九九四年）は、神隠しを扱ったモダンホラー。この長編では東北の地方都市が、怪異を発動する重要な要素となっている。閉ざされた場所へのこだわりは、水郷都市を舞台にした『月の裏側』（二〇〇〇

ガイド 第三回日本ファンタジーノベル大賞の最終候補となった、恩田陸の記念すべきデビュー作。魅力的なキャラクター、瑞々しい台詞、閉鎖空間へのこだわり、ジャンルミックスの手法など、後年の恩田作品の特徴がこの時点で出そろっていることに驚かされる。

本作でまず興味を惹かれるのは、冒頭で紹介されるサヨコのゲーム。ふとしたきっかけで始まったゲームが、生徒たちの間で語り継がれるうちに一定のリアリティを持ち、呪術的な力すら備えていく。こうした展開に言いようのない説得力があるのは、学校という空間が雅子の考えるように「変なところ」であることを、私たちも知っているからだろう。春に始まり、翌年の春に幕を閉じる物語のクライマックスは、「秋の章」で描かれる文化祭。サヨコ伝説にちなんだ芝居が彼岸へのドアを開けてしまうくんだり、何度読み返しても鳥肌が立つほど恐ろしい。ホラー史に残る名場面だ。

不穏なムードに満ちた物語に彩りを与えているのは、雅子と淡い恋愛関係にある同級生・唐沢由紀夫、その親友の関根根を軸に描かれる高校生活である。ただでさえ忘れがたい高校最後の一年間は、沙世子という来訪者が加わったことでいっそう記憶に残るものとなった。日常と非日常の境界線上を揺れ動くような沙世子のキャラクター造形に、作者の工夫が感じられる。

年、幽霊屋敷ものの『私の家では何も起こらない』（二〇〇年）にも見られる恩田ホラーの（といつか全恩田作品に共通する）傾向だ。

学校のもつ特殊な磁場に注目したホラーは比較的作例が多い。心霊調査事務所活躍を描いた小野不由美『ゴーストハント』シリーズ（二〇〇〇～二〇〇一年、旧題『悪霊』）シリーズ、一九八九～九二年）は、全七巻のうち四巻が学校を舞台にしたもの。旧校舎の怪談を扱った第一巻、女子高で怪異が頻発する第三巻、こつくりさんに似たおまじないが描かれる第四巻、廃校が舞台の第七巻と、バリエーション豊かに学校ホラーを書き分けている。

みやま
べ
宮部みゆき

『とり残されて』

ありふれた日常の中にある異界

あらすじ 小学校で臨時りんじの養護教師をしているわたしの前に、たびたび姿を現す男の子。「プールへおいでよ」という彼の言葉に導かれ、早朝のプールに足を運んだわたしは女性の死体を発見する。やがてかかってきた一本の電話により、男の子の意外な正体が判明する（表題作）。なぜだか毎晩同じ交差点の夢を見る永井梨恵子。その場所はどうやら彼女にとって深い意味を持つらしい。調査を依頼した探偵たんていのすすめに従い、梨恵子は夢の景色をスケッチし始める（「たった一人」）。日常と非日常が交差する、ホラー&ミステリ七編。



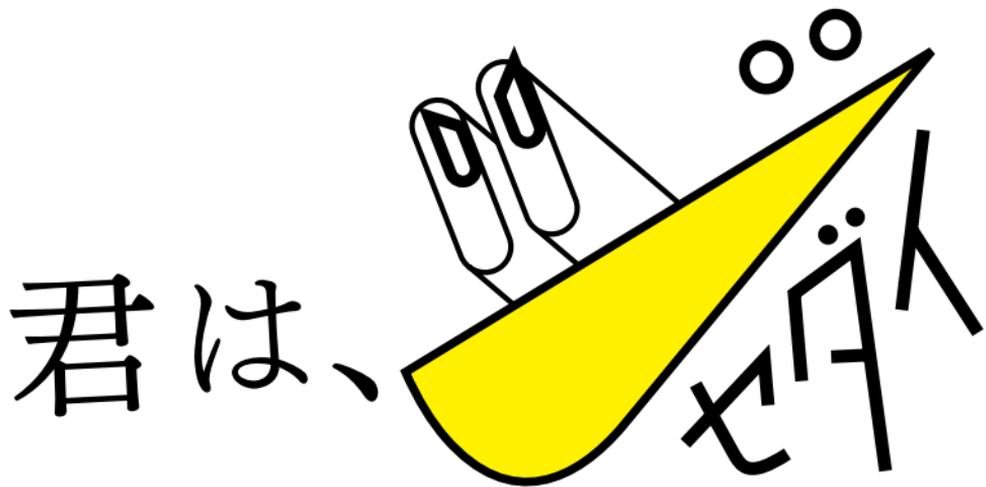
1992年9月、文藝春秋刊行。
書影は文春文庫版。

併読のススメ 宮部みゆきは実作者としてホラーの傑作を世に問うかたわら、熱烈な読者としてもホラーの魅力を発信し続けている。『贈る物語 Terno』(1002年)は怖い話を愛してやまない宮部が、海外ホラーの名品十五編を選びすぐったアンソ

ガイド 一九八七年のデビュー以来、骨太なミステリや時代小説を次々に発表し、日本のエンターテインメント小説を牽引する宮部みゆき。彼女もまたステイヴン・キングの影響を強く受けた作家の一人だ。たとえば超能力者の悲哀を描いた『龍は眠る』（九一年）は、著者自身「キングの完全なエピソード」を目指したと語るサスペンスの傑作。ミステリ・SF・ホラーの要素をミックスさせ波瀾万丈の物語を紡いでいる点、現代のかつ普遍的なテーマを描いている点、そして何より「恐怖」という感情に人一倍こだわっている点において、キングと宮部はよく似たタイプの作家であるように思う。

『とり残されて』もそうしたジャンルミックス志向が表れた短編集で、超自然現象を扱ったホラーから、閉鎖的な集落が登場するミステリ、奇妙な味の小品、ユーモラスな幽霊ものとバラエティに富んだ七編を収める。全編に共通しているのは、ありふれた日常が変化する瞬間を巧みに描いていることだ。文庫解説において書評家の北上次郎が「見慣れた風景が違った角度から照射されることで、いつもとまったく未知の風景として迫ってくる」と述べているが、言い得て妙。その引き金となるのは、名もなき人々が心の底に隠し持っている憎悪（表題作）や愛情（「たった一人」）などの強い感情だ。日常を壊すのは「普通の人」。それが宮部作品に常に漂う、怖さの秘密だろう。

ロジ。あえて著名なアンソロジーの収録作からセレクトされており、これぞベスト・オブ・ベストともいえるべき贅沢な一冊になっている。呪物が三つの願いを叶えてくれるW・W・ジェイコブズ「猿の手」や、家庭内に怪物が入り込んでくるフレデリック・マリヤット「人狼」などの古典系から、絵画に隠された恐ろしい秘密が明かされるデイヴィッド・マレル「オレンジは苦惱、ブルーは狂気」などのモダンホラー系まで幅広く取りそろえたラインナップは、他に類を見ない。ホラーの存在意義を正面から論じた、編者解説も必読だ。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!